アジアにつながる文化の輪！

日タイキッズラグビー交流リポート ～子どもたちが体験した“究極のボディーランゲージ” ～

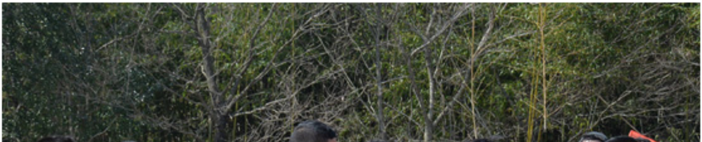
2015.04.30

186
ツイート
0
いいね！
G+1

「日タイキッズラグビー交流」は、2015年3月20日～22日に千葉県で開催された、日本とタイの小学生たちがラグビーを通して交流するイベントです。お互いの言葉を話せない日本とタイの子どもたちは、一体どのようにプレーするのでしょうか？　言葉や文化の壁を越え、ラグビーを通じて交流する子どもたちを取材しました。

目と目で、肌と肌で伝わるものがある

言葉が通じなくても、国や文化が違っても、目と目で、肌と肌で伝わるものがある――。



試合後は笑顔で握手。敵味方の関係なくお互いをたたえ合う「ノーサイド」の精神は、国境を越えます

「日タイキッズラグビー交流」がスタートしたのは、2008年に元ラグビー日本代表の向山昌利さん（一般社団法人 子どもスポーツ国際交流協会代表理事）が、タイでラグビーを教えたことがきっかけです。「日本のこと、タイのことを知る」「たくさんの友だちをつくる」「思いを伝え、理解するための道具を身に付ける」ということを主な目的にしています。今年は、タイのワチラウット校と千葉県の9歳～13歳のラグビーが大好きな子どもたちが、共に汗を流しました。

元ラグビー日本代表の向山昌利理事

「ラグビーは身体接触が多い競技です。肌と肌のぶつかり合いは“究極のボディーランゲージ”だと考えています。その中でラグビーが大事にしている“リスペクト”や“情熱”、“熱意”を持ってプレーすることは、子どもたちがいつか国際的な活動をする時に、大きく生きてくると思います」

ラグビーを通した国際交流の特徴について、向山さんはこう話しました。

タイの子どもから、日本の子どもへ。トライを決めるまでパスをつなぎます

スポーツは、違うということを認め合う触媒になる

5回目の開催となった今回、新たな試みが加わりました。

・タイと日本の子どもたちが2泊3日の共同生活を送る
・日本人とタイ人でつくったバディ（2人組）で行動する時は、バディとの行動中に母国語を使うことはNG
・交流戦は、日タイの混成チームで行う

「これまでは1日のホームステイでしたが、夕方から次の日の朝まででではあまりにも短い。一緒に共同生活をしたほうが、交流が深まるんじゃないかと考えたのです」と、実行委員会の繁田富久夫さんは話します。

10人ほどの日本人とタイ人混成のグループをつくり、一つの大部屋に寝泊まりし、行動します。最初は「何を言ったら通じるんだろう……」と不安な様子だった子どもたちも、つたない英語やボディーランゲージを用いて、次第にコミュニケーションがとれるようになってきます。

朝から晩まで一緒にいれば、子どもたちのケンカだって起こります。2日目には、日本人の子どもたちが集まって話をしている時にたまたまタイ人の子どもを見てしまい、タイ人の子どもが「自分のことを見て笑った」と思ったことが原因でぶつかりました。しかし、お互いに話をして誤解だということがわかると、握手をして仲直りすることができました。

出会ったばかりで言葉も通じない関係でも、感情をぶつけ合えるのも子ども同士だからこそ。「自分たちで解決して、いい経験になったと思いますよ」と向山さんは笑います。

日本人選手を中心に作戦会議中

子どもたちにも今回のイベントの感想を聞いてみました。

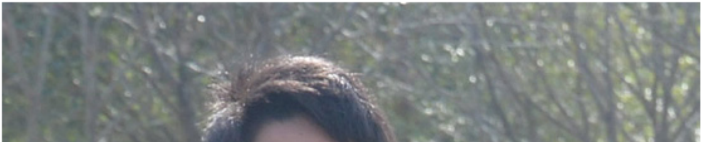
「ラグビーを通して日本の友だちがたくさんできてうれしかったです。また日本でラグビーをしたいし、今度はぜひタイにも来てほしいです。日本人はタイ人に比べて、お互いで助け合おうという気持ちがとても強いと感じました。」（6年生のアクサリンくん）

「これで日本は6回目ですが、今回交流した人たちも、わからないことを親切に教えてくれて、友だちとして迎えてくれました。日本は、やってはいけないことなどのルールをきちんと守って生活をしている国だと思います。」（5年生のタリットくん）

ラグビーに関しては、試合が始まる前にサインプレーを決めたことが大変新鮮だったようです。「僕たちは試合の前に決めごとをすることはありません。日本人は計画性があるんだなと思いました」とアクサリンくんは振り返ります。

子どもたちに同行している、ワチラウット校ラグビー部でコーチを務めるナタポン・ヘムユーさんによれば、ラグビーはタイではそれほど人気があるスポーツではなく、小学生チームは全国で5、6チームしかないそうです。世界ランキングも、日本の11位に対して64位（2015年3月30日現在）というのが現状です。

しかし、今回来日したワチラウット校は事情が異なり、設立者がラグビー好きな現国王ラーマ9世だったため、ラグビーは学校を代表するスポーツです。競技者は小学生だけで100人、高校までの学校全体でなんと約800人！　子どもたちは、学校の選抜メンバーに入るという直近の目標と、大学のチームに入るという長期的な目標を持って、日々練習に励んでいるそうです。



子どもたちのプレーを見守るヘムユーコーチ

「日本の選手は、練習に対して気合や集中力がありますね。子どもたちは自分を律することや一生懸命さ、責任感を日本人から学び、タイに帰ります」と、ヘムユーさんはイベントの意義について話してくれました。

日本の子どもたちにタイの子どもたちの印象を聞いてみると、
「自由。集団行動なのに1人で行動しちゃう」
「試合になると足が速くなった！」（「練習では少し力を抜いていると感じた」ということでしょうか・・・。）
といった感想が。
その他にも、お互いを理解し合えたことを喜ぶ言葉も聞かれました。
「ジェスチャーや顔などで表現すれば、タイの子にもわかってもらえた」
「チームも違って、国も違うのに3日間協力することで、何でもできるんだなと思いました」

日本の子どもたちはホストとしてリーダーシップをとろうと意識している様子でした。「試合に出ていない時は『頑張れ！』って応援するんだよ」と教えています

共通の目的に向かって、国籍を超えて協力するという体験

最終日に行われた、宿泊部屋対抗の交流戦。これまでは国別の対抗戦でしたが、寝食を共にした仲間が同じチームとなり、部屋別の日タイ混成チームで対戦することで、より絆を深めようという試みです。

以下試合の様子です。黒いパンツをはいているのが日本人、白いパンツがタイ人です。

ラグビーでとても大事なチームプレーの一つ、スクラム。日本人とタイ人が混ざって組みます！

協力し合って相手チームの突破を阻みます

試合の合間にはあちこちで自然とパス回しが始まっていました

すばしっこいタイ人選手。日本人選手も「足が速い！」とビックリしていました

試合後、集合場所に一緒に帰ってきた2人。すっかり仲良しです！

「簡単な英語とジェスチャーで伝わるよ」

「最初はバラバラで何をしていいかわからなかったけれど、最後の最後まで頑張ってやったので、試合の時にチームワークが出てきたと思いました。最後までやり続けるというのは、大切だと思いました」

「この体験で最高の仲間に出会えたと思います。これからもタイなどのさまざまな国と交流し、日本の友だち以外にも他の国の仲間をつくって、いつかはワールドカップで戦ってみたいです」

初めはバラバラだった子どもたちも、寝食を共にし、一緒に遊び、練習し、最終日の部屋別対抗戦での勝利という目標に向かって一丸と頑張ることで「チーム」となったのでした。

2泊3日の日程を終え、タイの子どもたちが乗り込んだバスを見上げ、日本の子どもたちは見えなくなるまで手を振り続けました。

向山さんはこのイベントを毎年継続していくことを1番の目標に挙げつつ、2019年の日本開催のラグビーワールドカップでメイン会場地に予定されている岩手県釜石市に、アジアのラグビーキッズを集めるイベントの青写真も描いています。

「スポーツは言葉や宗教の壁を越えるとよく言われますが、一方でスポーツが衝突のきっかけにつながることがあるのも事実です。僕たちはそういった側面もしっかりと理解

し、スポーツのポジティブな力をよりよく活用できる活動を続けていきたいです」（向山さん）

ラグビーを通じて、人と人、国と国とをつなげるこの取り組み。この体験は、子どもたちの視野を世界へ広げ、国や文化の違いを認め合うことで協働できることを知るきっかけとなりました。

その他の交流の様子

3月20日（金）に行われたカレー交流会で、説明を受ける子どもたち。タイと日本の子どもたちは、お互いを少し意識しながらも、笑顔を見せています！

「タイのカレーがおいしかった！」「タイ人は辛いカレーを食べていて驚いた」など、同じ食べ物を一緒に食べることで、お互いの距離が大きく縮まりました

3月22日（土）は、NEC我孫子事業場にて、ジャパンラグビートップリーグに所属するNECグリーンロケッツの講習会。子どもたちは選手たちに果敢に挑みますが、さすがに止めることができません！

グリーンロケッツの選手のサポートで、ラインアウト（抱えられて高いボールをキャッチするプレー）にも挑戦！　小学生の時にはなかなか体験できないプレーに、みんなも大興奮です

合同トレーニングの練習後の1枚

企画名称	日タイキッズラグビー
日時	2015年3月20日（金）～22日（日）
会場	千葉県我孫子市NEC事業場グラウンド・千葉県印西市東京電機大学平岡グラウンドほか
主催	日タイキッズラグビー交流実行委員会
助成	国際交流基金 アジアセンター
URL	http://www.tkse.org/

本事業は国際交流基金アジアセンター「アジア・市民交流助成プログラム」の助成対象事業です。この助成プログラムについてはこちらをご覧ください。

186
いいね！
ツイート
0
G+1

アジアにつながる文化の輪！